

Title	ごあいさつ
Author(s)	宍戸, 圭一
Citation	静脩 (1966), 3(3): 1-1
Issue Date	1966-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/36339
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1966年 8月

Vol. 3, No. 3

ご あ い さ つ

安 戸 圭 一

先般の図書館商議会で、はからずも館長の要職に選挙せられ、内規に従って、総長より委嘱、7月25日付で任命の発令があった。自然科学系教授としては、本学最初の館長であるが、旧帝国大学にあっても、現在、東大、阪大、九大などに例があり、先輩の堀江前館長からも、そんな意味も含めて激励されているので、何とか責をはたしたいと思っている。

生来理科系の、実験を主とした学問をやっているもので、図書については、門外漢とは言えないとしても、大した知識はない。しかしこの方は、先輩、同僚各位のご援助に待つことにするが、工学部の知識を生かした方面で、何か技術的に役立つ方面にも働らいて見たいと思っている。

差当っての目標は、学生諸君一般が利用する閲覧室を気持ちよくすることである。私所属の工学部工業化学教室のご好意で、飲料水冷却装置をゆずっていただくことになったのが、小さいことであるが、先ず手はじめである。目下各方面にご援助をいただくようお願いしているのは、200坪のあの部屋に冷房装置を入れることである。何分莫大な金額になることなので、困難も多いが、取敢えずの要務と考えている。

心 の 痕 跡

桑 原 武 夫

ジャン・ジョレスは、あらゆる本を読み、それをことごとく忘れた偉い人であった。

アランの著作のなかに、こうした言葉を見出したとき、私はおどろき、そして嬉しかった。私は小中学時代は恐らくクラスでも、一、二をあらそう読書家だった。高校に進んでからは山岳部に入り、やや戸外派に転じたので、読書の時間は減ったが、趣味は変らなかつた。フランス文学で文学士になってからも、読書とは専門以外の本を読むことと心得て、濫読はやめなかつた。

しかし、一方、“知行合一”の思想が私の心のなかで次第につよまっていた。この憬れは前からあったのだが、わずかながらの登山行為とマルクス主義に動かされたジャーナリズムとの影響があったかも知れない。ともかく、書物によってえられた知識ないし知恵は人生での実践に役立って、はじめて価値があると考えたいのであった。これには人生に役立たぬ本はあまり読まなくてもよい、という含蓄があるので、怠け心に口実をあたえもし